沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第３７集

沿岸地域遺跡分布調査概報（Ⅰ）

～沖縄本島・周辺離島編～

平成１８（２００６）年　3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

Introduction

はじめに

沖縄県は東西に約 1,000km、南北に約 400km の海域に散在する大小様々な島々で構成されています。日本で唯一の亜熱帯地域であり、日本本土では見られない特徴を数多く有しています。その中でも、サンゴ礁に囲まれた美しい海は、多くの人々を魅了し、海に関連した観光産業は、いまや沖縄県にはなくてはならない重要産業のひとつとなっています。現在だけではなく古来から、沖縄に住んでいた人々は海と密接に関わった生活をしてきました。海から獲れる多種多様な生き物は昔から重要な食資源として利用されていますし、沿岸部から取れる石は、建築物の材料としても使用されています。また琉球王国時代には、海を媒介とした交易によって、中国をはじめ東南アジアの国々との交流を通じ、伝統工芸、芸能、祭祀及び風俗など多彩な文化を汲みいれ、独自の文化を作り上げてきました。このように海は、沖縄の文化を形成する重要な要素のひとつです。このことから、沖縄県の沿岸地域には文化財が数多く存在していると考えられます。そこで、沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成 16 年度から国の補助を受けて、沿岸地域における遺跡の分布調査を行っています。ここではこれまでに得られた成果の一端を紹介します。

本報告が多くの方々に活用されますとともに、埋蔵文化財の保護と活用について関心を持っていただければ幸いに存じます。

平成 18（2006）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　田　場　　清　志

Method of investigation

調査の方法

調査はまず、文献や聞き取りによる情報収集から始めます (写真 1)。得られた情報を基に遺跡が存在しそうな地域を絞り込みます。次は、実際にその地域の踏査を行います (写真 2)。踏査の結果、石切場跡や塩田跡等の生産遺跡を見つけることができれば、位置の記録と写真撮影を行います。また、陶磁器などの遺物が散布している状況が確認できた場合は、その付近の海底もあわせて調査します。海底でも遺物が確認された場合は位置を記録します (写真 3)。状況によっては、実測図を作成します (写真 4)。その後、現況を写真撮影します (写真 5)。

分布調査によって、石切場跡・塩田跡・魚垣跡等の生産遺跡や海岸・海底に遺物が散布する場所、歴史を持つ古港等が少しづつ確認され、集成されています。

写真１

文献記録を調べたり、聞取調査を実施します。その成果を基にして、遺跡が存在しそうな場所を絞り込み、調査の計画を立てます。

写真２

実際に踏査を行います。その結果、石切場跡や遺物散布地等の遺跡が確認された場合は、位置を確認し現況の写真撮影等を実施します。

写真３

海底でも遺跡が確認された場合は、目標物の真上に浮袋を浮かべて、GPS によって位置記録を取ります。

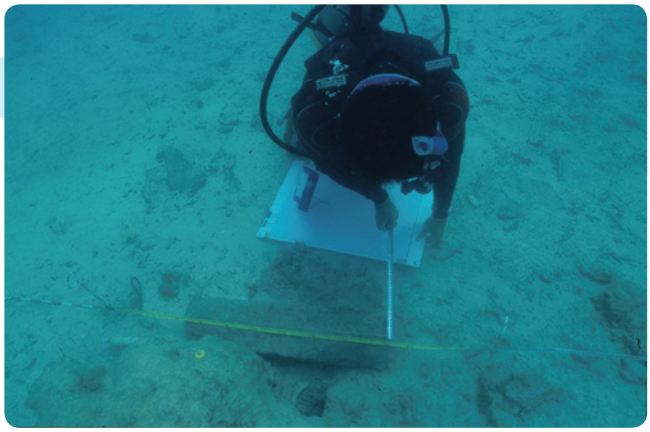


写真４

潜水して実測を行います。実測の方法は陸上での方法とほとんど変わらず、水中に水糸を張り、メジャーで正確に測りながら実測図に記録していきます。

写真５

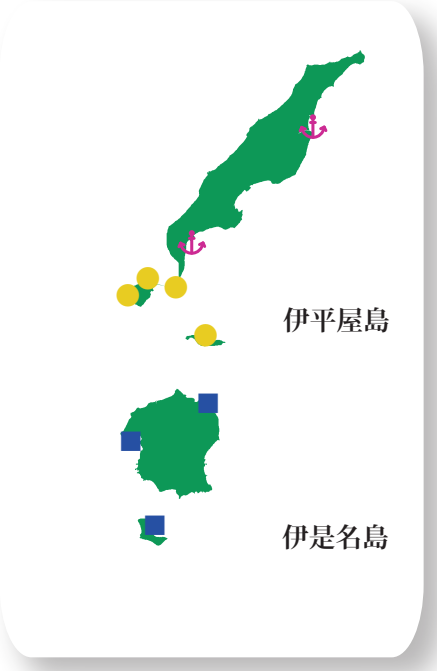
最後に写真撮影を行います。カメラは防水ケースに入れた特殊なカメラを使います。水中は、陸上と環境が異なるため、水中撮影に関しての知識が必要となります。

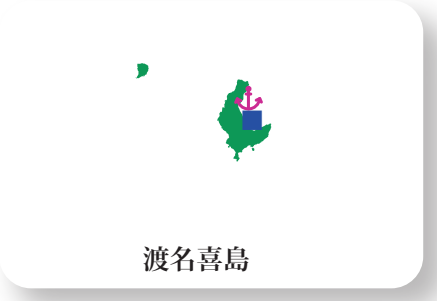
Map of coastal site

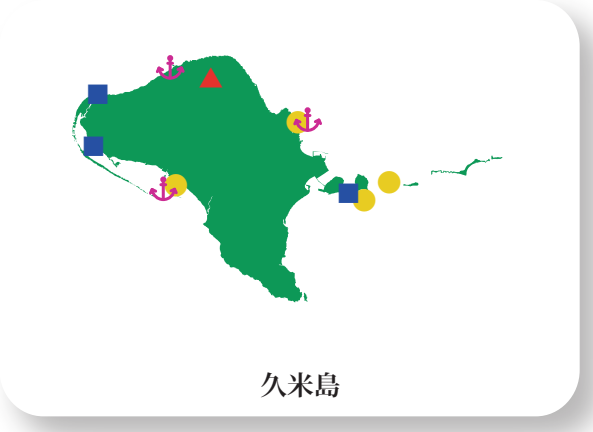
沿岸の文化財マップ

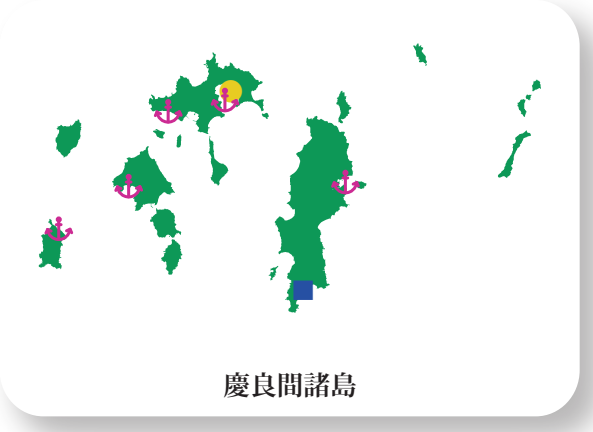
分布調査の結果、沿岸地域には現在までに以下のような場所に対象の文化財があることがわかっています。

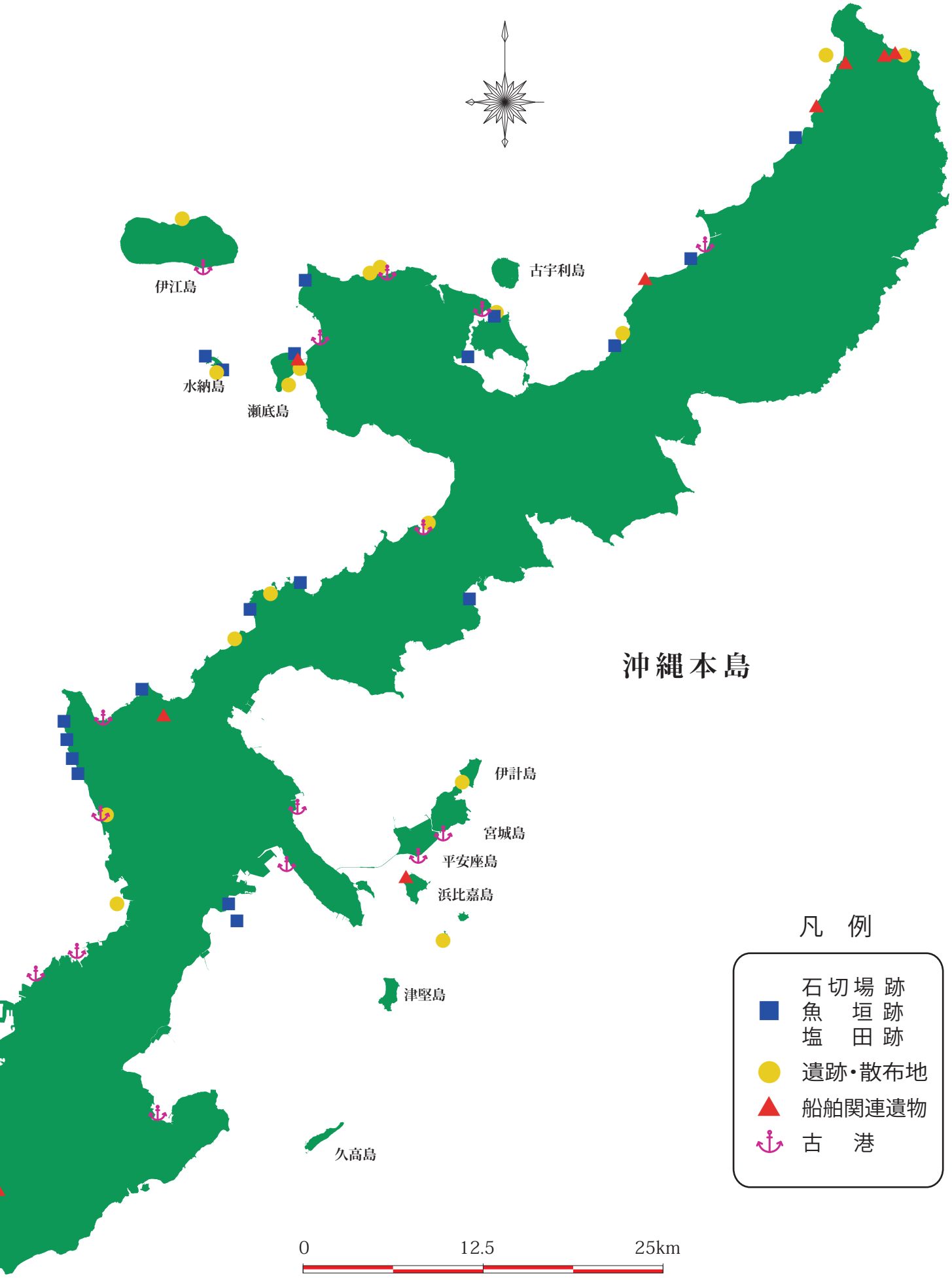
- ● 遺物散布地等の遺跡がある場所を表しています。
- ▲ 陸上に引き揚げられ、構築物やモニュメント等に転用されている船舶関連の海揚がりの遺物がある場所を表しています。
- ■ 石切場跡・塩田跡・魚垣跡等の生産遺跡がある場所を表しています。石切場跡はビーチロックの精製される場所に集中し、塩田跡・魚垣跡は遠浅の場所に限られています。
- ⚓ 『正保国絵図』に記載されている古港や、「唐船グムィ」等と呼ばれる伝承がある場所を表しています。







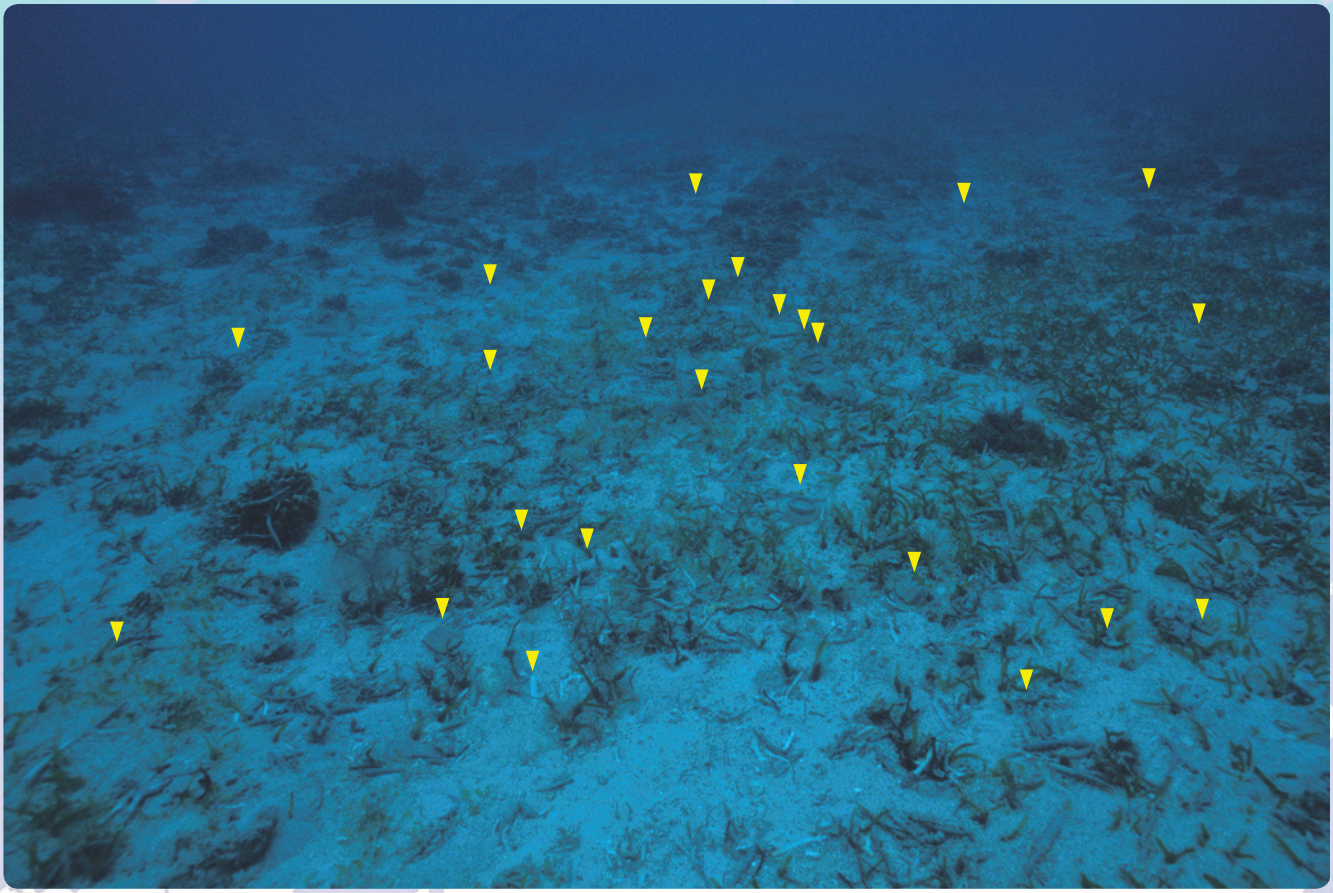



伊江島
古宇利島
水納島
瀬底島
沖縄本島
伊計島
宮城島
平安座島
浜比嘉島
津堅島
久高島
凡　例
石切場跡
魚　垣跡
塩　田跡
遺跡・散布地
船舶関連遺物
古　港
0
12.5
25km

Relics that sink in sea

海底に散布する遺物

沖縄県の沿岸地域には、多くの遺物が散布している場所があります。散布する遺物の種類は様々ですが、陶磁器が多く確認されています。現在の成果では 12 世紀後半～ 13 世紀前半の中国産陶磁器（青磁劃花文碗等）から近世・近代の沖縄産陶器まで確認され、年代幅もあります。このように陶磁器が海底に散布する理由は色々考えられますが、その多くは船舶からの流出であると考えられます。陸上遺跡では 12 世紀頃から陶磁器が確認され、文献記録によると、1372 年、中山王察度による明への進貢を始まりに、1874 年の最後の進貢まで、幾度となく進貢船・接貢船、冊封船等が中国・琉球間を往来しています。その他にもシャム（タイ）やマラッカ（マレーシア）等への南海貿易船や、琉球国内の連絡線・運搬船等も航行していました。船の中には沿岸で座礁、沈没したものもあると考えられます。



久米島町オーハ島沖海底（黄色い矢印 ▼ は陶磁器がある場所）

久米島町オーハ島

沖縄本島の西に位置する久米島は交易船等の停泊所として良く利用されていたと考えられます。久米島の東に位置するオーハ島南東岸沖の海底には、14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる中国産陶磁器が多量に散布しています。これらは、海難事故による交易船の沈没か積荷の投棄等によって残されたものと考えられます。

久米島町オーハ島遠景

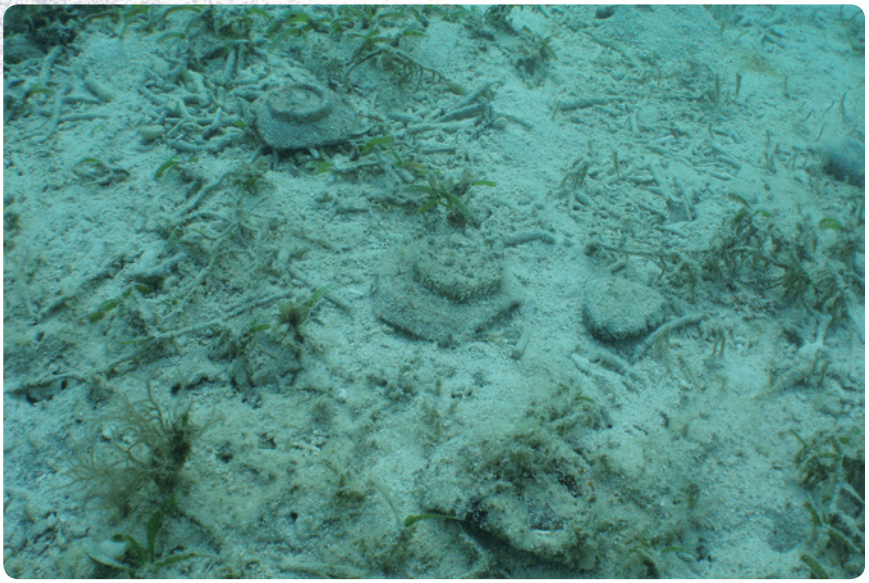
オーハ島の南東岸沖です。海底一帯の広域な範囲に、多量の中国産陶磁器が散布している状況が確認できました。旧仲里村教育委員会による分布調査でも報告されています。

久米島町オーハ島海底

14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる磁器で、大きな中国産青磁の盤の底部が確認できます。かなりの摩耗を受けています。

久米島町オーハ島海底

14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる磁器で、中国産青磁の碗の底部です。いくつか密集しているのが確認できます。砂上に露出しているため、今後も波によって違う場所へ移動していくと考えられます。

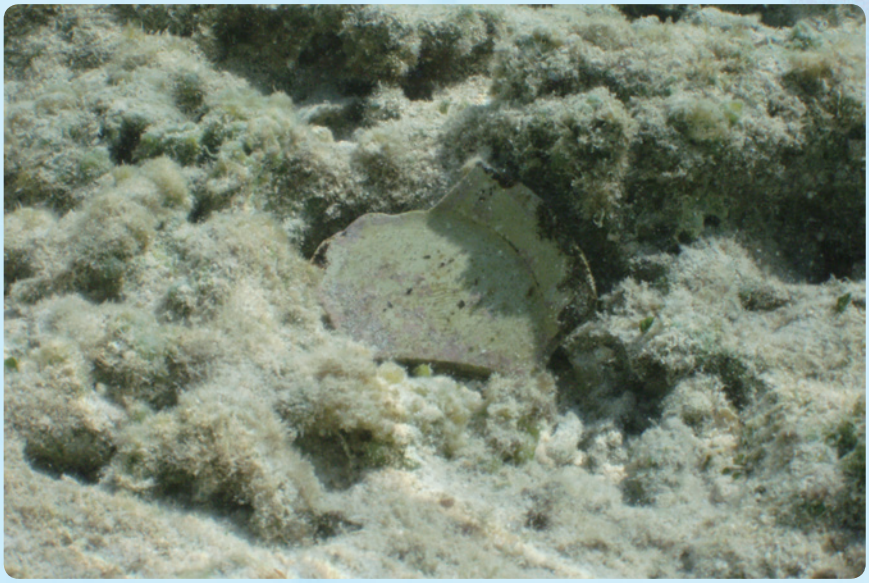


久米島町ナカの浜遠景

久米島町ナカの浜の遠景です。ここの海底では、12 世紀後半～13 世紀前半と考えられる陶磁器が多量に散布している状況が確認できました。また、ナカの浜は多くの研究者によって表面踏査されている場所です。

久米島町ナカの浜沖海底

12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる磁器で、中国産青磁の碗の底部です。いくつか密集しているのが確認できます。岩盤の上に露出しているため、今後も波によって違う場所へ移動していくと考えられます。



久米島町ナカの浜沖海底

12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる磁器で、中国産青磁の皿です。内面に櫛描文が見られます。海底の岩盤の隙間に挟まっています。あまり摩耗を受けていないため、最近になって砂中から露出したものかもしれません。

本部町水納島沖海底

14・15 世紀頃の陶器で、タイ産褐釉四耳壺です。水納島南東側沖の海底で確認できました。珊瑚に取り込まれています。この他、中国産褐釉陶器の壺も散布している状況が確認できました。

座間味島阿護の浦海底

14 世紀後半～ 15 世紀と考えられる磁器で、中国産青磁の碗の底部です。「唐船グムィ」と呼ばれる深場の周辺で確認できました。この他、近世・近代の沖縄産陶器も多量に確認できました。

恩納村当袋川河口

14 世紀後半～ 15 世紀と考えられる磁器で、中国産青磁の碗の底部です。当袋川の河口が干潮となった時、陸上で確認できました。付近には恩納グスクがあります。

伊江島湧出海岸

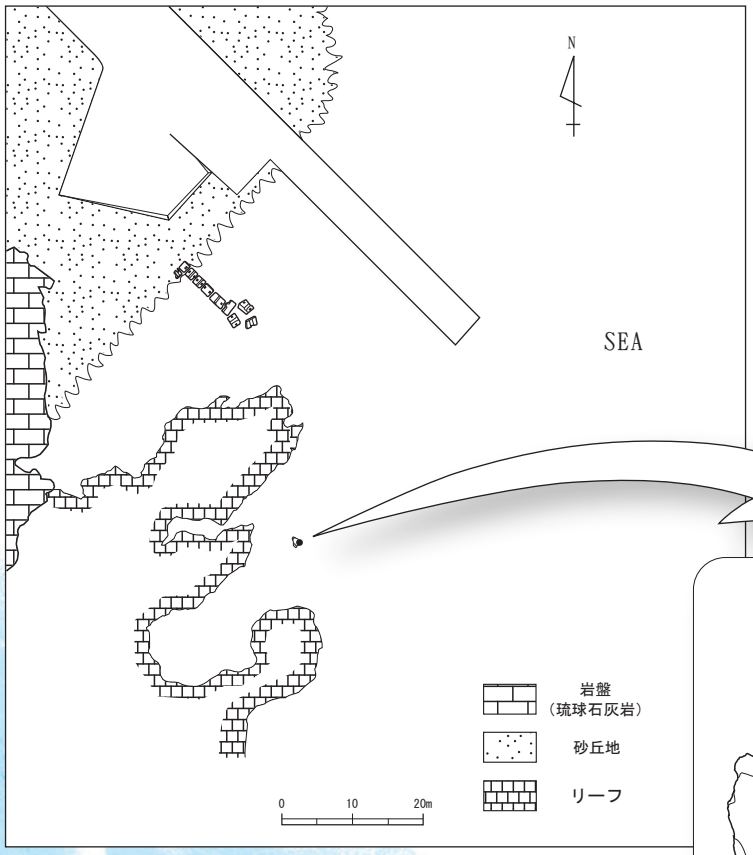
15 世紀後半～ 16 世紀と考えられる磁器で、中国産青磁の碗の底部です。湧出海岸では、この時期の陶磁器が多量に散乱している状況が確認できました。中には、岩に取り込まれて見分けがつきにくいものもあります。伊江村教育委員会による分布調査でも報告されています。

伊江島湧出海岸沖海底

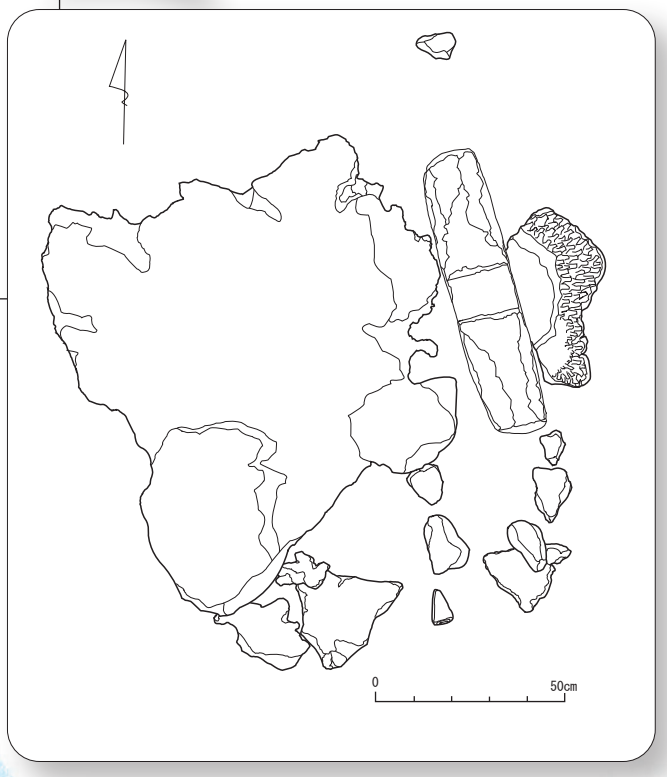
15 世紀後半～ 16 世紀と考えられる磁器で、中国産青磁の細連弁文碗です。湧出海岸では陸上の他に、海底でも遺物の散布が確認できました。

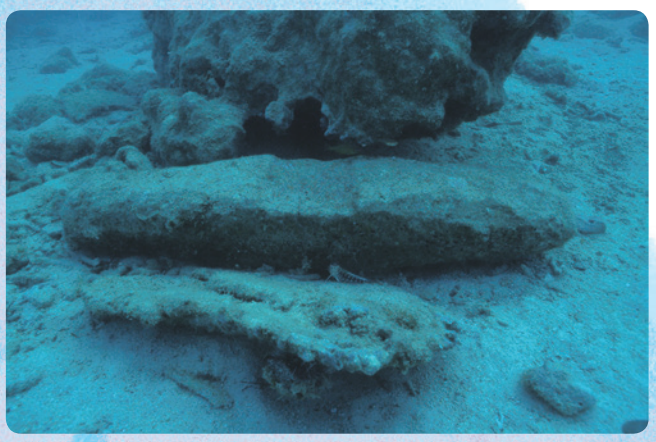
国頭村宜名真沖海底

19 世紀後半と考えられる磁器で、中国産の染付碗です。国頭村宜名真沖の海底では、この時期の陶磁器が多量に散布している状況が確認できました。文献には、1874 年、イギリス商船が座礁・沈没した記録があり、それに関わるものだと考えられます。

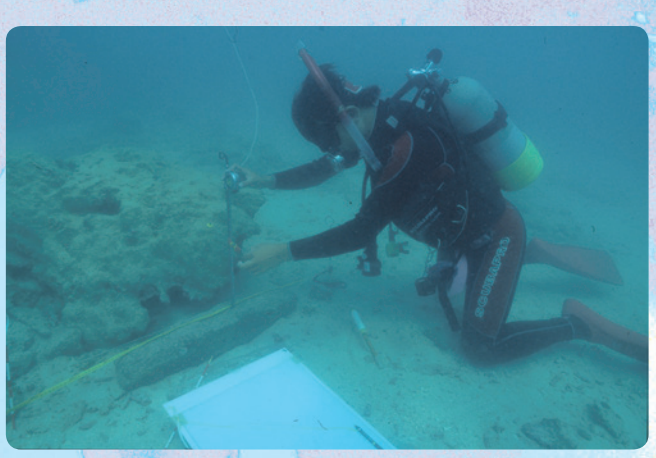


瀬底島アンチ浜遠景





碇石確認状況



碇石実測風景

本部町瀬底島

本部町瀬底島のアンチ浜沖の海底で、碇石が確認できました。これまでにも沖縄諸島では碇石が発見されていますが、全て陸上で確認されており、このように海底から碇石が発見されたことは初めてです。この場所が実際に船舶の停泊地として利用されていたことを示す資料として、また、船舶の構造を知る資料として、とても意義のあるものです。

Production ruins of coast

沿岸地域の生産遺跡

沿岸地域には、昔の人々が石材を取るために石を切り取った場所である石切場跡、塩を精製する場所である塩田跡、潮の干満の差を利用して魚を取る魚垣（ナガキ）跡等のいわゆる生産遺跡が数多く存在しています。

石切場は、海岸部に良く見られるビーチロックのある場所に限られます。ビーチロックとは、サンゴ礁の発達する海浜の潮間帯に多く見られ、海浜堆積物が主に炭酸カルシウムによるセメント作用で凝固した板状の石灰質砂礫岩を指します。柔らかく、切り取りや加工が容易のため、石材に適しているといえます。写真（下）の恩納村真栄田の石切場跡は広範囲に渡って石が切り取られ、独特の景観を放っています。

塩田は、遠浅の海岸に石積みで囲んだ場所を造り、満潮干潮の中位ほどの面に塩田面を築きます。太陽からの熱で水分を蒸発させ、撒砂に塩分を付着させます。この砂を集め、海水をかけて、かん水を採り、塩を作ります。今帰仁村ヤガンナ島や名護市屋我地島周辺は塩田跡が良く残っています（写真右上）。

魚垣は潮の干満の差を利用して、満潮時に石積み内に入った魚を石積み内に閉じ込めて捕獲する漁法です。県内では保存状態の良い魚垣跡は少ないのですが、渡名喜島の魚垣跡は比較的保存状態が良く魚垣の形態がよく分かります。

恩納村真栄田の石切場跡

今帰仁村湧川からヤガンナ島にかけて見られる塩田跡

渡名喜村の魚垣跡

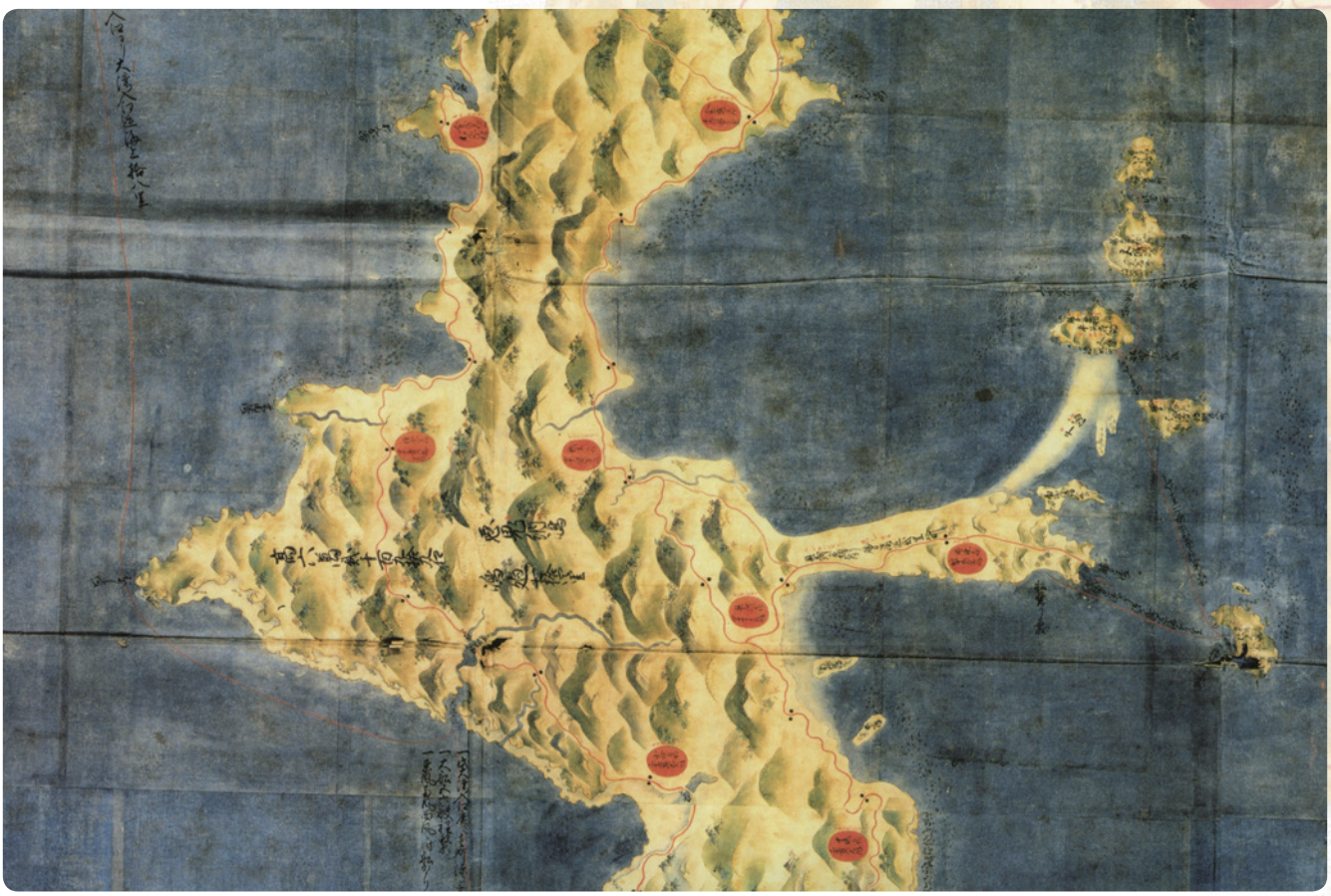
Ancient port where legend remains

古い絵図や伝承が残る古港

沖縄には古くから利用されていた重要な港がたくさんあります。すでに使われていない場所もあれば、現在でも沖縄県内の島と島、沖縄県と本土、沖縄県と外国を結ぶ港として利用されている場所もあります。今回の分布調査には、そのような古くから利用されていた古港の現状を把握する目的もあります。

主な資料としているのは『正保国絵図』で、1644 年に三代将軍家光の命によって諸国の大名が献納したものです。したがって、17 世紀にはすでに港として利用されていた場所を中心に調査しています。島と島を繋ぐ拠点として多くの船舶が集まった港には、積み荷や不要物の投棄等によって、当時の遺物が残されている可能性があり、埋蔵文化財を確認する手がかりとなります。今回の調査によって、唐泊と呼ばれる場所や『正保国絵図』に記載された古港から碇石や陶磁器等の遺物が確認できました。

重要な港ほど現在も利用されており、調査が難しいのですが、すでに利用されていない港の場合は、歴史的な景観を良く残す場所となっています。



『正保国絵図』に記載された港と航路

座間味島阿護の浦遠景

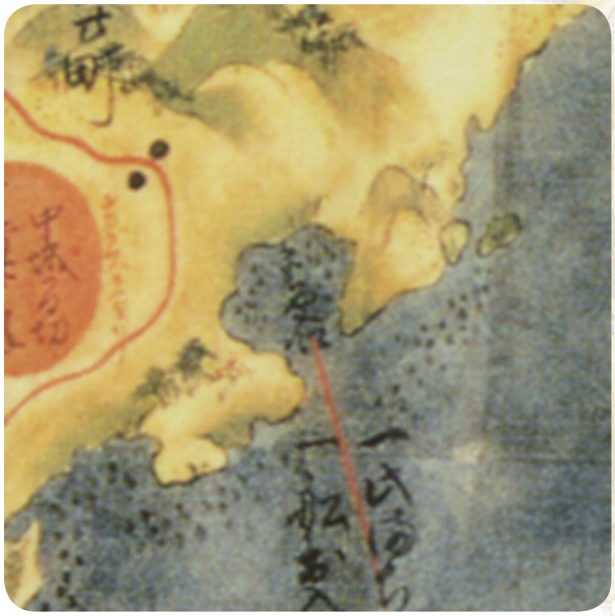
『正保国絵図』に記載の阿護の浦

航空写真から見た阿護の浦

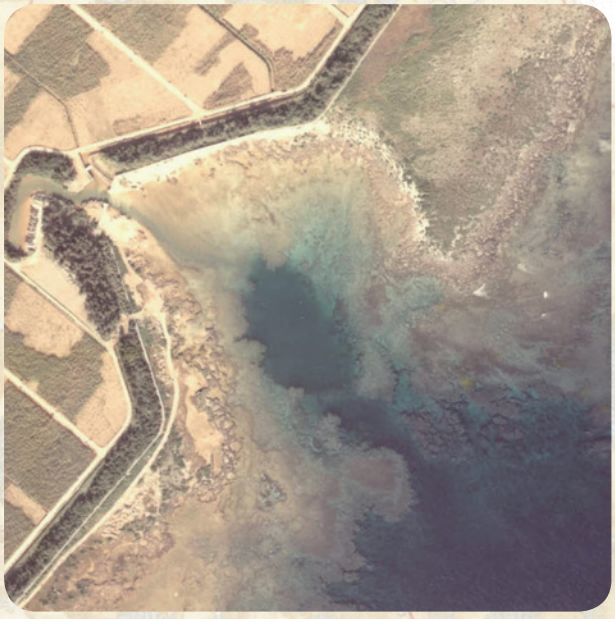
座間味島阿護の浦

上の写真は座間味島阿護の浦です。進貢船等が風待ちのためよく停泊していたと言う伝承が残され、「唐船グムィ」と呼ばれています。阿護の浦の海底では、中国産陶磁器や沖縄産陶器が散布する状況が確認できました。停泊していた交易船や輸送船等からの流出物の可能性もあります。地元の方の話によれば、阿護の浦は強風でも比較的波が静かな湾だが、ある一定の方向から吹く風には弱く、大荒れとなるようです。

久米島真謝港遠景



『正保国絵図』に記載の真謝港

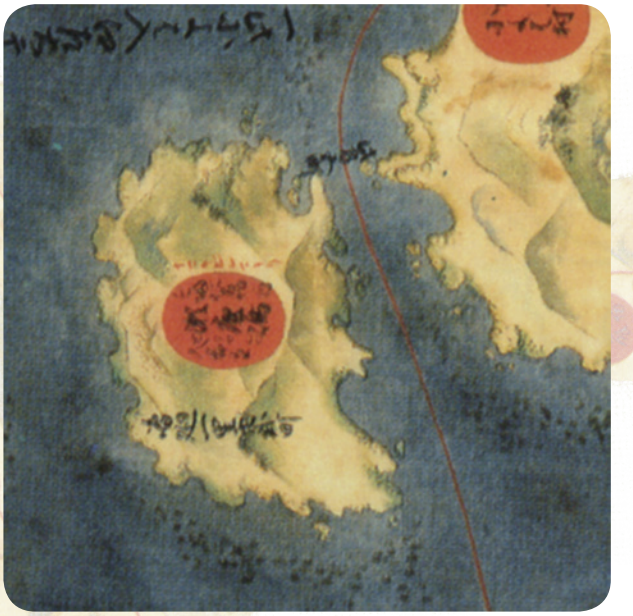


航空写真から見た真謝港

久米島真謝港

上の写真は久米島北岸に位置する真謝の古港です。1756 年、尚穆王の冊封のため来琉途中の冊封使一行の船が真謝港外で座礁した、という記録が残っています。海岸では、中国産陶磁器（清朝代）や、沖縄産陶器が確認できました。港を利用していた人々や、停泊していた船舶等からの流出物の可能性もあります。久米島には南岸に『正保国絵図』に記載された兼城港があり、風や季節によって使い分けていたと考えられます。

唐泊と呼ばれる海峡（本部町瀬底島から）



『正保国絵図』に記載の航路

航空写真から見た航路

本部町唐泊

上の写真は唐泊と呼ばれている本部半島と瀬底島の間の海峡です。現在でも重要な航路として利用されています。瀬底島沖の海底では、中国産陶磁器や沖縄で製作されたと考えられる碇石、沖縄産陶器が確認できました。また、過去にも寛永通宝が詰まった銭甕や中国産陶磁器が海底から引き揚げられています。

このように、古港や重要な航路の海底には多くの遺物が確認されます。

Relics that relates to sea

陸上で確認される船舶関連遺物

陸上には船舶と関連があると考えられる遺物が数多く残されています。船舶の停泊具であるイカリ（鉄錨・碇石等）や船を安定させるためのバラスト（重り）等が構築物の材料にされたり、モニュメントとなっています。これらの遺物は沈没船から引き揚げられたり、陸上に打ち揚がったもの、不要となって転用したものだと考えられます。このような遺物の存在は、その近くの海域に沈没船等の遺跡があるかどうかを判断するヒントにもなります。

今回の調査では、近世・近代の異国船が座礁・沈没し、そこから引き揚げられた鉄錨やバラスト、中国の交易船に使用されていたと考えられる碇石、沖縄で製作されたと考えられる碇石等が確認できました。

国頭村奥の鉄錨

国頭村奥には、1874 年に国頭村宜名真沖で座礁、沈没したイギリス商船から引き揚げたと言われる鉄錨が展示されています。昔は船舶を係留する重しとして使われていたようです。

国頭村安田のバラスト

上記の鉄錨の他にも、船舶を安定させるためのバラストが引き揚げられています。写真は用途もなく無造作に置かれているバラストです。同じものが国頭村宜名真のオランダ墓や、今帰仁村の源為朝の碑にも用いられています。

うるま市浜比嘉島の碇石

浜比嘉島の浜集落には、船舶の碇石であったと考えられる碑が民家の石垣の脇にあります。瀬底島アンチ浜沖の海底で確認された碇石と似ています。

恩納村山田グスクの碇石

恩納村山田グスクにあるメーガー（井戸）には、石積の一部として船舶の碇石が使われています。この碇石は中国で建造された交易船に使用されていたと考えられ、なんらかの理由により井戸の一部として転用されたようです。

参考・引用文献及び資料

・沖縄県教育委員会　1992 年　『琉球国絵図史料第一集－正保国絵図及び関連史料－』
・沖縄県教育委員会　1994 年　『歴代宝案』約注本第 1 冊
・沖縄県教育委員会　1997 年　『歴代宝案』約注本第 2 冊
・伊江村教育委員会　1999 年　『伊江島の遺跡』伊江村文化財調査報告書第 13 集
・奥のあゆみ刊行委員会（編）　1986 年　『奥のあゆみ』
・當眞嗣一　1996 年　「南西諸島発見の碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第 22 号　沖縄県立博物館
・北谷町教育委員会　1994 年　「インディアン・オーク号の座礁地」『北谷町の遺跡』　北谷町教育委員会文化財調査報告書第 14 集
・球陽研究会（編）　1974 年　『沖縄文化史料集成 5　球陽（読み下し編）』角川書店

編　　集　片桐千亜紀
編集協力　宮平真由美・崎原　恒寿
執　　筆　片桐千亜紀・比嘉　尚輝
デザイン　比嘉　尚輝・宮平真由美

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 37 集

沿岸地域遺跡分布調査概報（Ⅰ）
～沖縄本島・周辺離島編～

発行年　平成 18（2006）年３月３１日
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　09 8(835)8752
印　刷　沖縄県浦添市字沢岻 70 番地
〒 901-2112
TEL　098(878)5666

ⓒ沖縄埋蔵文化財センター　2006　printed in japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。